



安楽死前日に診察を受ける英国人老婦(手前)

大特集 理想の逝き方を探る

安楽死年間二千人

ベルギーの悩み

うつ病にも安楽死が許される国の現状

宮下洋一

ジャーナリスト



三十七歳で精神疾患に悩む宮下洋一



ティンボン女医

「私、毎日、死にたいと思っているのよ。この気持ちを分かってくれる人なんていないけれど……」

年明け早々の一月五日、ベルギー北部のアントワープ。二〇一七年の仕事始めは、安楽死の許諾を医師から得た三十歳のベルギー人女性に会うことだった。彼女を前に「ハッピーニューイヤー」という挨拶が適切なのかどうか悩んだあげく、結局、口にするのは控えた。

「こんにちは、エイミー」「こんにちは」

彼女はにこりと微笑んで、先に右手を差し出してきた。

エイミー・ドゥ・スビュッテルは、現在一人暮らしをしている。自閉症を併せ持つ心的外傷後ストレス障害(PTSD)という複雑な精神病を抱え、自殺未遂経験は合計十三回。なんとか「生き延びて」いる。一六年十二月、私は、精神科医の

ただ、対面して話を聞くと、笑顔の豊富なエイミーが安楽死を望んでいるとはとても思えなかった。

エイミーは大学で物理学の博士号を取得し、エンジニアとして五年間勤務。その後、ダイヤモンドの分光器を扱う職にも就いた。一時期生活したカナダでの時間と、二十代前半に付き合った恋人との四年間が、自分の人生で最も「辛くなかった時期」と打ち明け、「いつか自然豊かな日本に行きたい」と夢を語った。

だが、現在無職で収入のない彼女には、安楽死を望むに至る辛い過去があった。

「昔はスポーツも大好きで、陸上やバスケが得意だったのよ。でも、身体の成長とともに自分の存在が理解できなくなり、十二歳の時に手首を切ってしまった。すぐに病院に搬送され、精神科医との生活が始まったの。地獄の日々だったわ」

少女時代、エイミーには一般の子供には現れない数多くの症状が見受けられた。境界性と統合失調型のパーソナリティー障害が併発し、愛着障害とも診断された。

途方に暮れる少女は、十三歳のある日、家出した。街中を徘徊し、手にした小銭で初めてアルコールを口にした。二日間、消息が途絶えた少女を見つけたのは、警察だった。

十九歳までの六年間、エイミーは精神科施設を転々とした。「鎖でつながれた独房生活」を強制されるという悪夢のような日々を過ごした。

「眠るのが怖い」と口にするのは、その時期の出来事がフラッシュバックするためだ。夜中、思いもつかないう行動に出ることも頻繁にある。

「ごめんなきい、変なメールを送ってしまった。この数週間、精神状態が良くなって。翌朝起きたら、ワインボトル一本が空になっていた

わ。その日、またナイフで身体に傷をつけたのよ」

そう言っ、エイミーは右の太腿を指差した。「見えない部分にたくさん傷があるのよ。最近、よくやってしまうわ」と顔をしかめた。

私はエイミーに尋ねた。医師から許可された安楽死をいつ行動に移し、彼女が思い描いてきた安らかな眠りに就く考えなのか、と。

彼女は、不思議にも和らいだ表情を見せ、さらりと答えた。

「分らない。やっど死ぬるのだという気持ちで安心しているのは確かね。でも、もう少し生きてもいいかなど、最近、思っているわ」

眼前で安楽死した老婦

「安楽死先進地域」とも言われるヨーロッパ。私はエイミーのような三十歳の精神疾患患者でも安楽死が認

められているベルギー以外にも、スイス、オランダなどの安楽死事情を取材してきた。

オランダでは、医師が患者に注射を打って死に至らす「積極的安楽死」と、患者自身が致死薬を体内に入れて自死する「自殺補助」のいずれも合法。しかし、スイスでは後者のみが合法とされているなど、一口に合法化されていると言ってもその制度の中身は様々だ。

取材の中では、日本でも議論されるがん患者による安楽死の「現場」を目の前で目撃したこともある。

昨年一月、自国では制度化されていない安楽死を求め、スイスに渡航していた八十一歳のイギリス人老婦のケースだ。

子供のいない彼女は、約十年前に夫に先立たれてから孤独な老後生活を送っていた。前年に腫瘍が見つかり、それに伴う肉体的苦痛から逃れ

女医が心の用意ができたら点滴のストッパーを開くように伝えると、老婦は躊躇わずに致死薬を体内に流し込んだ。それから、わずか二十秒。老婦の口が半開きになり、頭部が右の枕元にコクリと垂れた。まるでソファでうたた寝を始めたかのようだった。

母の最期を直視できない娘

安楽死事情を取材していて分かるのは、安楽死が実行された後に、トラブルとして報じられるケースが欧州各国であるということだ。

老婦の選んだスイスやオランダは、監査機関による安楽死の管理が整備されていることから、後に訴訟に転じるケースはあまり耳にしない。その一方、公的機関の管理が厳重でないとわれ、倫理問題や訴訟に発展するケースが少なくないのが

ように、自殺補助を決意した。

死の前日、老婦はホテルの一室で、スイスの自殺補助団体『ライフサークル』代表の女医エリカ・プライシック(58)と、次のような会話を交わしていた。

「なぜ、今」が人生を終える時だと思うのか、教えていただけますか」「これから先、私の健康状態が改善される見込みはないためです」

安楽死を望む患者に対し、医師は周囲の影響を受けていないか、友人はいるのか、老人ホームで暮らすことはどうか、といった質問を繰り返す。時には家族が安楽死を促して保険金を狙うこともあるため、本人の意思が明確とされない場合、自殺補助は即座に中止される。

末期以外のがん患者に対しては、治療の可能性もあることを伝えることが義務だ。プライシック女医が、担当医からその説明を受けたかどうか

ベルギーだ。

例えば、一三年に性転換手術を受けた男性が精神的に追い詰められ、安楽死を選択。昨年九月には、十七歳の末期がん患者が世界初の未成年として安楽死を迎えている。

ベルギーで安楽死が合法化されたのは、二〇〇二年五月に遡る。十六人で構成される「安楽死管理評価連邦委員会」は「医師の免責」を目的として法制化。その後、「登録された安楽死」の件数は、同年の二十四件から、一五年の二千二十二件にまで急増している。

ベルギーでは、年月の経過とともに安楽死の目的が変化している。当初の「医師の免責」から、「患者の権利」に次第に焦点が移り、その中で懐疑論も浮上してきたのだ。

アントワープ大学で、哲学・生命倫理を専門に扱うウィレム・レマンズ教授(53)は、安楽死の法制化そ

かと尋ねると、老婦はこう答えた。

「受けましたが、それを望んでないのです。もし私が今まで満足のいく人生を送ってこなかったら、もう少し長生きしようと思ったのかもしれないね」

自らの八十一一年間が「良き人生だった」と口にする、老婦の目から涙が溢れ出た。そして、その人生が身体の衰弱によって失われることは避けたいと断言した。

自殺補助の当日、私の目の前にはまだ元気に生きていけそうな老婦がベッドに横たわっていた。腕には、ストッパーの付いた致死薬入り点滴の針が差し込まれていた。

女医が最後に質問した。「これから、あなたに何が起こるか分かっていますか」

老婦は、一瞬、たじろぐ姿も見せたが、しっかりとした声で答えた。「はい、私は死ぬのです」

のものに疑問を呈している。

「当初は安楽死に賛成か反対かの極論しもなく、当時リベラル勢力が政権を担っていたベルギーでは賛成を求める市民の声が法律に反映されました。しかし、安楽死には広大なグレーゾーンがあり、現在の制度はその部分を強引に白か黒か判断してしまっている。そもそも人の死が法律によって決められるのはおかしい話です。法が存在しなかった時代のほうが正しい判断が下されていたのかもしれないね」

二項対立の議論の末に安楽死が法制化されたことで、逆に無視されたり、社会の目が届かなくなってしまう「死」もあるというのだ。

ベルギーでは精神疾患の患者が安楽死を選ぶケースも増えている。

昨年五月、私はアントワープに住む語学教師、リン・ヤスペルス(36)に会う機会を設けた。彼女の

母親・レーンが、うつ病により安楽死を遂げた顛末を聞きためだった。リンは約一時間半にわたり、三年前に六十八歳で死去した母親との思い出を振り返った。

リンは私が過去に出会った遺族とは違い、悲しみを引きずる様子を見せなかった。その理由は、開口一番発した、彼女の胸懐が表していたように思う。

「母が安楽死を実現できたことは、私にとって、喜びなのです」

一九四五年生まれの母・レーンは、二十四歳の時、六歳年下の男性と結婚した。庭師の夫は口うるさく、気難しい性格だった。結婚当初、レーンは老人ホームで働くパートタイムの看護師だった。

夫婦には長男と次男が生まれ、末っ子にリンが誕生するが、後に別居。リンは成人になるまで母と同居した。正式に離婚に至ったのは九二

年だが、リン曰く、父には長年、別の女性がいたのだという。

離婚後、レーンの精神状態は悪化の一途を辿っていく。ある日、リンは母親が寝室で寝たまま起きないことに気がつく。兄も駆けつけ、起こしても反応しない母を救急車で病院まで送った。寝室では服用した睡眠薬のケースが見つかった。

「ごめんね。ごめんね」

レーンは病室で泣きながら、子供たちにただただ謝った。この自殺未遂以来、レーンは日中は精神病院で過ごし、夜中に帰宅する生活を数カ月間続けた。うつ病、過敏症、周期性嘔吐症候群と診断された。

「母は離婚後も、毎日、父のことはかり考えていました。離婚の責任はすべて自分にあり、妻として失格。ちゃんと料理を続けていれば、こんな結果にならなかった、と。」

元気な頃は、母の家でご飯を食べ

感情は別として母に協力することを約束。二人の兄も「それしかない」と言い、納得してくれたという。

一四年六月二十一日午前十一時。

レーンの自宅には、リンの夫と兄二人の家族、親族や母親の友人が訪れていた。コーヒーやシャンパンなどが用意され、家族や仕事といったありふれた会話だけが交わされた。

午後二時、家のベルが鳴る。レーンを長年担当してきた四十歳の医師だった。リンは、この瞬間に「とても複雑な気持ちになった」と話す。まだ会話をし、食べて飲んで、普通に生きている母親の声が、もうすぐ聞けなくなると悟ったからだ。

医師は集まる家族と友人を前に、「お母様は、致死薬を飲んで安楽死します」と告げた。レーンは、「死ぬなら自分で死にたい。先生を困らせたくないのよ」と言った。

レーンは、医師が注射を打って患

者を死に至らす「積極的安楽死」を選んだのではなく、彼女自らが致死薬を体内に流し込んで死を迎える「自殺幫助」を選んだのだ。

「積極的安楽死」で医師に最期を託すか、「自殺幫助」で自己責任とするかは、患者本人の死生観に関わる部分が多い。前述した通り、スイスでは医師に責任を負わず「自殺幫助」のみが合法化されているが、ベルギーでは二種類の区別はせず、すべてひとくくりにして「安楽死」と呼ぶことが多い。

この日まで安楽死に力を貸してきたリンだが、最期の瞬間、母の寝室には足を運ばなかった。「死にゆく母を見る勇気がなかったから」だと振り返る。レーンはそんな娘を見て、こう言ったという。

「旅立ちを許してちょうだいね」

リンは、母の頬にキスをし、強く抱きしめた。そのまま一人になった

ると、私の好きなミートボールやチヨコムースをよく作ってくれました。それが、次第に出来合の料理になりました。いつもお洒落だった母が、急にノーメイクとパジャマ姿にもなって……」

リンが三十三歳の誕生日を迎えた日、母親は彼女にこう言った。

「ずっと眠っていたいわ。私は、生きているんじゃないの。ただ生き延びているだけなのよ、リン」

その言葉が、「安楽死」を意味する比喩であるとリンには分かった。むしろ、この会話を待っていた気分にならなかつたという。母はさらに具体的な話を打ち明けた。

「お医者さんとは、この半年間、安楽死について相談してきたのよ」

母の口から「安楽死」という用語を告げられると、リンの目からは涙がこぼれた。しかし、母の表情は明るく嬉しそうだった。リンは自分の

リンは、しばらくしてから外に出た。煙草に火をつけ、震える手で無心に吸い続けた。最後の煙を吐き出し、先端の火をもみ消すと、家の中からは兄の泣き声が聞こえてきた。

安楽死を断念した二十四歳

現在、安楽死合法の国々で、その最期を望む患者には、最低以下の三つの条件が求められる。

- ① 耐え難い痛み
- ② 回復の見込みがない
- ③ 本人の意思

安楽死の中でもベルギトで最も議論を呼び、その是非や未来のあり方を問いかけるのが、冒頭のエイミーや安楽死で逝ったレーンのような精神疾患患者の例と言える。

ベルギー国内でも、精神疾患患者の安楽死には反対が大半を占める。精神疾患の場合、①と②の判断が難

しく、反対派の声が根強いからだ。ベルギー国外でも批判の声が上がっている。昨年十二月、アメリカ精神医学会は、「ベルギーやオランダでは、担当の精神科医が末期でない精神疾患患者の自殺を手助けするか、致死薬を打って患者を死に至らしめている」と非難した。

○二年当時、ベルギーの「安楽死管理評価連邦委員会」の一員だったフェルナンド・クルールニール弁護士(69)は、法制化の過程を振り返る。「法の作成段階で難しかったのは、精神疾患患者の条件でした。一体、人はどこまで他人の精神的苦痛を理解できるのか。うつをはじめとする精神的な苦しみは、とても主観的なもので医師が客観的判断を下すことが難しいのはわかっていました。ただし、世界保健機関によると『健康』とは『肉体的にも精神的にも、すべてが満たされた状態であるこ

現在、ローラは女医のクリニックで行われる茶話会に定期的に顔を出すといい。精神科医を信用していなかった三十歳のエイミーが、ティンポン女医に心を打ち明けるようになったのも、「安楽死」が許諾されたことが大きな理由だと言う。

時には国内外から「人殺し」と誹謗中傷を受けていることをどう思うかと尋ねると、ティンポン女医は語気を強めた。

「もちろん私だって、精神疾患患者に生きていてもらいたい。それが私の役目です。『殺す』なんていう意識は微塵もありません」

エイミーが別れ際に囁いた一言が、私の耳元から離れない。「もう少し生きてても良いかなと、最近、思っているわ」

重度の精神疾患患者にとって、「死ぬことができる」という選択肢を持つことが、「生きよう」という

と』。精神領域についても議論するのは間違っていないはずだ」

一方、ベルギーの公的研究機関・欧州生命倫理研究所のカリヌ・ブロシエル氏(60)は、安楽死そのものにも反対の立場だが、精神疾患患者への適用についてはより批判的だ。

「精神を患う人々には第一に家族のサポートや思いやりが必要です。彼らを治療できる精神科医も多いはず。しかし、ベルギーでは死は個人の自由であるというドグマがまかり通ってしまった。安楽死によって残された遺族には、大きなダメージが残ることを忘れてはなりません」

一五年十一月、反対派を後押しする出来事がベルギーで起きた。

重度のうつ病を患い、安楽死を選ぶことを公言していた二十四歳の女性・ローラが、直前に死を断念したのだ。やはり死の決断は揺らぐのではないか。彼女を追っていた英誌

原動力になる――。安楽死が、ある種の「予防策」のように作用することまで議論されているのだ。

安楽死こそ「安らぎ」

ティンポン女医らが主張する安楽死の予防作用は、精神疾患だけに当てはまることではない。

進行性脊髄疾患による苦痛から安楽死の許可を得た上で、昨年のリオデジャネイロ・パラリンピックの陸上女子で二つのメダルを獲得したベルギーのマリーケ・フェルフルト(37)は、レース直後に「安楽死は私にとって死ではありません。それは安らぎを意味するのです」とし、以下のようにメディアに語った。

「安楽死を認める書類がなければ、おそらく私は自殺をしていたでしょう。他の国々でも安楽死について議論ができるようになってほしいと考

『エコノミスト』の動画が公表されると論争となり、反対派は「ベルギーは安楽死の実験室なのか」と息巻いた。

ローラに安楽死を許可したことで批判を浴びたティンポン女医(エイミーの担当医でもある)に話を聞くと、精神疾患の実態が社会に理解されないことを嘆いた。

「ベルギーでは、がん患者などに安楽死という選択肢があることによつて、患者自身が安心感を得ることに理解が得られます。しかし、十年以上も闘病を続ける深刻な精神疾患患者については同じことを理解してもらえない。残念でなりません」

ローラが死を諦めた背景にも安楽死の存在があったと強調した。「安楽死という選択が合法でなければ、重度の精神疾患患者たちは自殺という選択肢に追い詰められ、自殺未遂を繰り返してしまうのです」

えています。そうすれば人々はより長く生きられる。事実、私は〇八年に安楽死に同意する署名をして、八年後の今、パラリンピックでメダルを獲ったのですから」

昨今、ベルギー、オランダ、スイスでは、クオリティ・オブ・ライフ(人生の質)の悪化を恐れる初期の認知症患者や無病の後期高齢者、さらには高齢夫婦が同時安楽死を求める事例などが世間を騒がせている。今後、新しいスタイルの安楽死は年々増え続けていくだろう。

「個人の死の自由」が尊重される中、こういった肉体的苦痛を伴わない人々にも広がる安楽死は、一体どこまで許容されるべきなのか。法制化によって救われる人もいれば、そうでない人もいる。

安楽死を認めた欧州の国々もいまだに大きな悩みの種を抱え、未来への課題と格闘しているのだ。